

魅惑的で啓蒙的なサイ

ガーヤトリー グプタさんとの対話 第三話

スワミの神聖なるご意志 - スワミの大学へ入学

GG: 私はサイ大学のアナンタプール校（女子大）へ入学しましたが、優秀な成績でもなく、金メダルを受賞したわけでもありません。私の目的はスワミをハッピー（幸せ）にすることでした。そして、そのことで私が成功した数多くの出来事がありました。



RS: では、あなたは住んでいたチットウールの学校を卒業した後、ぶらぶら時間を過ごし、シュリ サティヤサイ大学から修士号を取得することに決めました。そして、素晴らしい2年間をここで過ごしました。そのことについて話して頂けますか？

GG: スワミは決して誰も傷つけたりなさいません。そ

れゆえスワミは20年後に私を呼び戻されたのです。それまで、多くの物語が語られ、私自身にも多くの奇跡が起こり、逸話やリーラ（神の遊戯）を自分の目で見て来たにもかかわらず、私の心の中にはスワミへの信愛がありませんでした。そして突然、原則を重んじる私の父が来て言いました。「バケツとコップ、手提げカバン、衣類、スーツケースを買って来なさい。そして、アナンタプールの大学に行きなさい」

私たち家族は、父の命令には絶対服従でした。私は大学に願書も出していないし、入学試験も受けていませんでした。それなのに、どうして父は私が行くことを考えたりできるのだらうと思いました。「もし入学せずに帰って来たら、この家

にお前の居る場所はない」それが、家を出発する前に、父が私に与えた最後通告でした。そして、私はプッタパーティにやって来ました。

RS: バケツとコップとスーツケースを持ってですか？

GG: はい。私は母と一緒にでした。私たちは大学に行きました。そこにはゴーカク博士（サイ大学の初代副学長）がおられました。ゴーカク博士は「誠に申し訳ありませんが、それは全く不可能なことです。どうかすぐにお帰り下さい。あなたは願書も出していないし、入学試験も受けていません。それに学期はすでに始まっています。大学が始まってからもう1ヶ月近くになります。なぜ、空きがあるなどとお考えですか？」とおっしゃいました。

でも、私はどうしても入学したいので必死でした。

RS: なぜなら、あなたはここ以外、何処にも行くところがなかったからですね！

GG: そうです。どの学校も取りつく島がありませんでした。私はあまりにも規律に欠けていました。私はどの大学にも願書を出していなかったのです。

RS: あなたは（大学の）学部課程を修了して、ただ家にいようと決めていたのですね？

GG: 「ちょっとのんびりしよう」と考えたのです。私はギターが大好きで、自分がマイケル ジャクソンの妹だと夢見たりしていました。私は演説が得意です。一人芝居が得意です。よく討論会にも行きました…基本的に、勉強以外のものはすべて得意だったのです。



ですから、父は私に規律を教える潮時だと考え、スワミのアナンタプールの女子大が私には最適だと考えたのです。ですから、私はプッタパーティに残りました。ある日、スワミは群衆の中から私をお呼びになり、副学長をお呼びになって、「この娘に席を与えてやりなさい」とおっしゃ

いました。副学長は「スワミ、それは不可能です」と答えました。「私は命令しているのです。この娘に席を与えなさい」とスワミはおっしゃいました。

RS：おお！ 学長（スワミ）があなたの援護をなされた。これは特別ですね。

GG：そのとき、私は心の底から叫びました。「スワミ、あなたは私になんと大きな愛をくださったのでしょうか！」スワミはアナンタプールの女子大学の校長先生を呼んで、「この娘を車で一緒に連れて行きなさい。そして大学に入学させなさい」とおっしゃいました。こうして、私の幸せな二年間が始まりました！ 私が祈るすべてのことが聞き入れられました。

私には、哲学科、英文科、テルグ語学科に、とても良い仲間たちがいました。私たちはシュリ サティヤ サイ大学のアナンタプール キャンパスで、初めての修士号を取ったグループです。その後、学校はディームド ユニバーシティー（政府機関から高度教育と認定された大学）となりました。

サイ大学の学生になって初めて、私はスワミがすべてであり、私たちは絶対にスワミから離れてはいけないということを悟りました。

RS：では、あなたがお母さんのお腹の中にいた時、スワミはあなたをセーラムへ追い返したにもかかわらず、20年後にはあなたを呼び戻して、その間の空白を埋めて下さったわけですね。

GG：そうです。

RS：あなたが、スワミと意思の疎通が出来るようになった、大学時代のエピソードを幾つか聞かせて頂けますか？ たしか、あなた方の五人グループは、卒業の時にバガヴァンと交流する機会があったように記憶しています。スワミはあなた方に特別なインタビューを与えて下さいましたね？

GG：はい。

RS：そして、あなたはバガヴァンに捧げものをするために、特別作戦をリードしましたが、あまり上手く行かなかったとか。その時のことを話してもらえますか？

スワミが私たちの祈りに応えて大学を訪問



GG: 前回、スワミがアナンタプールにおいで下さってから、もう何年も経っていました。ですから、私たち仲良しグループは奇抜なアイデアを考えつきました。それは、私たち一人ひとりが1年365日、各自がスワミに招待状を出すというものでした。

「スワミ、どうか私たちのキャンパスに来て下さい。私たちを祝福して下さい。スワミ、どうかぜひ来て下さい」というものでした。

そうこうしているうちに、スワミはアナンタプールに来て下さいました。そして、その時、私たちは劇を演じました。それは、大変感動的な聖者のお話でした。劇の間中、スワミは椅子に座ってご覧になっていました。最後の場面で、私たちは皆、手を差し伸べてスワミをお呼びしました。

「スワミ、私たちのためにそこにおられるのなら、どうか来てくださいませんか？」スワミは直ちに玉座から立ち上がり、そこに立たれました。それがクライマックスでした。

そこにいた私たちの先生の一人が、一枚もシャッターを切らないまま、何度もカメラの焦点を合わせていました。そして、私が跪いた時、スワミは私をご覧になって、「フィルム ウンダー？」(カメラの中にフィルムは入っているのかね?)とお尋ねになりました。その時の写真はありません。

その後、スワミが別の機会にキャンパスに来られたとき、私に新たなチャンスがやって来ました。私の友達は、プログラムの中でベジタブル(野菜)の女王に扮していました。校長先生からは、私が女王の隣に立つ許しはもらっていませんでした。でも、私は理由を付けました。もしベジタブルの女王が衣装ですっかり覆われて立っていたら、誰もベジタブル(野菜)のことを説明する人がいません!ですから、私は校長先生に、説明のために私をベジタブルの女王の隣に立たせるべきだと訴えました。校長先生の許可を得られなかったにもかかわらず、私はシ

エフの格好をして、巨大な刀を手に持ちました。スワミは副学長のゴーカク博士と一緒においでになりました。そこに立たれたスワミは、私をご覧になっておっしゃいました。



「何？ ベジタブル！ 何のベジタブルですか？ どのようにして作ったのですか？ あなたはクッパム ファミリーのサラランマの娘ですね。私は彼女をよく知っています。お母さんは色々なことをしていました。娘も色々と創造的なことをする才能をお母さんから受け継いだのですね」

そのように、スワミはとてもハッピーで楽しんでおられ、褒めてくださり、ゴーカク博士に説明していらっしやいました。

スワミから頂いたインタビューの中で一番の思い出の一つは、1985年の5月に、大学院生の全員を呼んで下さった時のことです。私たちはいつものように

インタビュールームの中でスワミを囲んで座っていました。私は、「スワミ、チューダンディ スワミ。見て下さい、スワミ、私たちは五人の学生です。サティヤ（真実）、ダルマ（正しい行い）、シャーンティ（平安）、プレーマ（愛）……」そして、私は最後の言葉を忘れてしまいました。そのとき、スワミは優しく私の頭を叩いておっしゃいました。

「ドゥンナポータ！ 非暴力です！ こんなことも知らないのですか？」

そこでも、私たち五人の学生はスワミのためにあることをしようと決めていました。私たちの愛のほんの小さな印として、スワミにローブ（スワミの着ておられる長い服）を差し上げようと考えていたのです。でもスワミは受け取って下さいませんでした。ですから、インタビュールームを出て行くとき、私たちは部屋の片隅にローブを置いて出て来たのです。そして、私たちは外できれいに並んで座っていました。その後、スワミが外に出ておいでになり、

「ドゥンナポータ！ なぜローブをあそこに置いて来たのですか？ だれであれロ

一ブを置いて来た者は試験に落第させます」とおっしゃいました。ですから、私たちは皆、震えながら祈りました。

「スワミ、もしあなたが落第させるとおっしゃるなら、どうして私たちは修士号を取ることが出来るでしょう？」

スワミはいつも、そのような優しいユーモアを交えて下さいます。スワミが何を言われようとも、どのように言われようとも、スワミは私たち皆を幸せにして下さるのです。

次号（第三部後半）に続く

http://media.radiosai.org/journals/vol_10/01AUG12/04_gayatri_03.htm